

湿性地の エゾノギシギシ

(別名：ヒロハギシギシ)

科 名：タデ科
学 名：*Rumex obtusifolius* var. *agrestis*
原産地域：ヨーロッパ～アジア

湿性地の ナガバギシギシ

(別名：チジミスイバ)

科 名：タデ科
学 名：*Rumex crispus*
原産地域：ヨーロッパ～アジア

【どんな被害を引き起こすのか】

生態系：在来植物の駆逐

- ・湿地に生育する在来植物と競合し、駆逐する
- ・絶滅危惧種ノダイオウやマダイオウ等の在来タデ科ギシギシ属植物と雑種を形成、遺伝的攪乱を引き起こす

産 業：農作物への被害

- ・牧草地や畑地、果樹園等の強害雑草となる

【生育場所】

・牧草地、樹園地、畑地、道端、河岸、林地等

<エゾノギシギシ>

- ・湿地を好むが乾燥地でも生育し、肥沃地からやせ地まで適応する
- ・亜高山帯にも生育

<ナガバギシギシ>

- ・日当りの良い湿った立地を好み、裸地に速やかに入り込む
- ・低地～高地、肥沃地～やせ地に生育する

エゾノギシギシ

高さ 0.3 ～ 1.3m の多年生草本

<花>

- ・花期は5～9月
- ・茎の先に長い花穂をつけ、淡緑色
- ・6花被片の小さな両性花を多数つける



<果実>

- ・長さ3.5～5.5mm、幅2.5～3.5mm
- ・卵型の翼があり、縁に刺状突起を持ち、赤みを帯びる
- ・内萼片の中脈がこぶ状にふくれる

<葉>

- ・下部の葉は長い柄がある
- ・葉身は長さ12～30cm、幅5～12cm
- ・卵状長楕円形、基部は心形
- ・縁は細かく波打ち、中央脈は赤みを帯びる
- ・上部の葉は柄が短く、先がとがる
- ・葉の裏面脈状に突起状の白毛が密生

ナガバギシギシ

高さ 0.5 ～ 1.5m の多年生草本

<花>

- ・花期は4～7月
- ・茎の先に長さ30cm程の花穂をつける
- ・緑色の6花被片からなる小さな両性花を多数つける



<葉>

- ・下部の葉は長い柄がある
- ・葉身は長さ10～30cm、幅3～8cm
- ・長楕円形
- ・縁は著しく波打つ
- ・茎につく葉は短柄～無柄

<果実>

- ・長さ4～5mm、幅3～4.5mm
- ・広卵型の翼があり、縁は全縁
- ・内萼片の中脈がこぶ状にふくれる

【特性】

・種子生産量が多く土中での生存期間が長い ・根茎でも繁殖し再生力が強い ・耐寒性が強く亜高山帯にも生育 ・在来種のギシギシ属植物と交雑

【どこまで広がっているか】

長野県では

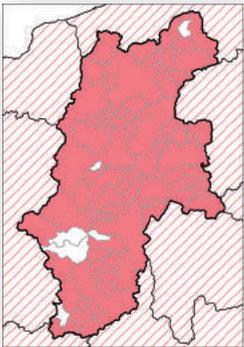
- ・県内に広く野生化
- ・上高地では、交雑により純粋なノダイオウが著しく減少しているといわれている

全国では

- ・エゾノギシギシ：明治中期頃に北海道で確認
- ・ナガバギシギシ：1891年頃に東京都で確認
- ・現在は、北海道～沖縄に広く野生化

世界の分布

- ・エゾノギシギシ：世界中（温帯域）
- ・ナガバギシギシ：世界中（温帯～熱帯域）



2019年現在
■ 定着 ■ 一部地域に定着

【間違わないで！】

主な類似植物（在来種）

こぶなし

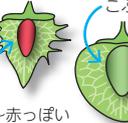


全縁か低鋸歯縁

ノダイオウ（タデ科）

- ・全県の低山帯の湿草地に見られる
- ・高さ1m以上になる
- ・花期は6～8月
- ・果時の内萼片の中脈がこぶ状にふくれない
- ・内萼片の縁は全縁または低い鋸歯がある
- ・葉の裏は無毛
- ・環境省・長野県レッドデータブック該当種

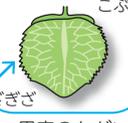
こぶ状



赤～赤っぽい

エゾノギシギシ（左）
ナガバギシギシ（右）

こぶなし



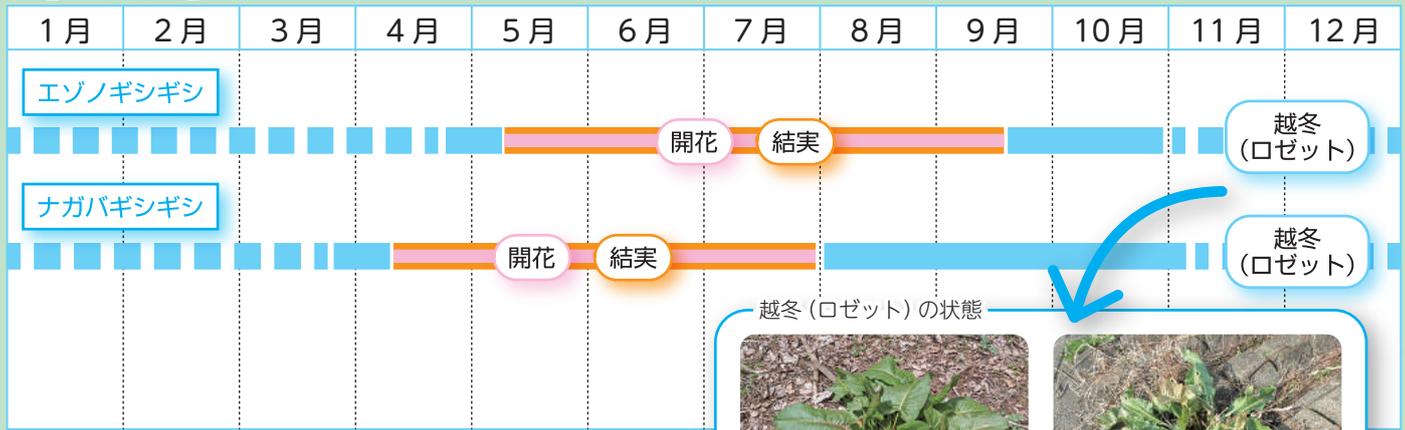
ぎざぎざ

果実のちがいが

マダイオウ（タデ科）

- ・低山地の水辺に見られる
- ・高さ1.5mになる
- ・花期は6～7月
- ・果時の内萼片の中脈がこぶ状にふくれない
- ・内萼片の縁には鋭い鋸歯がある
- ・葉裏の葉脈上に毛状突起がある
- ・日本固有種

【生活史】



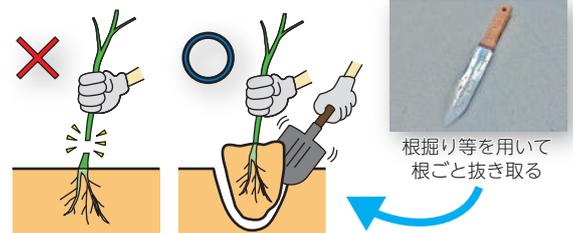
【防除方法】

花の刈り取り 増やさない

- 花の部分のみ (花をつけた茎) を刈り取る
- 根から抜き取る作業に比べて簡易であり、開花や種子生産を抑え、交雑や種子の拡散を防ぐ効果がある (ただし、再び成長して花をつけるため、根絶はできない)
- 年1回以上、継続して実施する
- 開花結実期間が長く、また識別は花での識別が簡単なことから、4～9月の間に花の刈り取りを実施する
- 定期的な実施のほか、見つけ次第、花を刈り取ることが望まれる

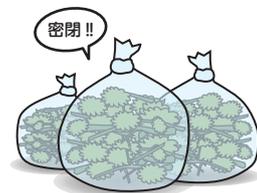
抜き取り 根絶を目指す

- 根からの抜き取りは素手では困難
- スコップ、根掘り等を用いて、手作業により根から抜き取る (できるだけ根を残さないように！)
- 年1回以上、継続して実施する
- 開花結実期間が長く、また識別は花での識別が簡単なことから、4～9月の間に実施する
- 種子の生存期間が長く、土壌シードバンクを形成している可能性があり、継続した実施が必要
- 定期的な実施のほか、見つけ次第抜き取ることが望まれる



きっちりと処分する ～作業前・作業後～

- 湿原や河川敷等では、在来種ノダイオウやマダイオウが生育している可能性があるため、駆除はエゾノギシギシやナガバギシギシといった外来性ギシギシ属であることを十分に確認してから実施すること
- 刈り取った花や抜き取った株は、種子が飛散しないよう密閉できるゴミ袋等に入れて枯らす
- それぞれの自治体のごみ処理方法に従って焼却処分する
- 湿原等を訪れる際は、衣服や長靴等に他の地域の種子が付着していないかどうかを確認し、持ち込まないよう注意すること



【注意】

『国立公園・国定公園・長野県立自然公園・長野県自然環境保全地域』では、地区や地域ごとに植物の採取、掘り取り等が規制され、国（環境大臣）または県知事の許可が必要となる場合があります。対象地が自然公園内に該当するかについては

「長野県統合型地理情報システム 信州くらしのマップ」のホームページサイト

をご利用ください。

また、実施にあたっては、県地域振興局環境課にご相談下さい。